

シンポジウム

論題 中世から近世へ

——存在論の変容——

司会 東北大学 清水哲郎

提題：認識・自然本性・神

京都大学 川添信介

提題：スピノザと中世スコラ哲学

——（自己）原因概念を中心に

神戸大学 鈴木泉

提題：存在の重さについて

——ア・プリオリな神証明を通して

東洋大学 村上勝三

（於 筑波大学 2004.10.31）

司会

清水哲郎

「中世から近世へ」という問題を立てる際には、すでにそこには、斜陽となり停滞した、図体ばかり大きくて活動力を失ったものが没落していく一方で、若い息吹と可能性に満ちたものが名乗りを挙げ、先立つものを踏み越えて己が世界を切り拓いていく、といった物語りが予想される。だが、近世的なものの自体が有効性を失い、乗り越えられるべきものとして意識されるようになった現在、私たちは、西洋哲学史についての従来の物語りでは済まされない状況にある。「中世から近世へ」という大枠自体を消すべきなのかもしれない。とはいえ、この大枠に代るものがことばに結晶するためには、まず、思想の歴史を把握する新しい切り口、新しい視線が登場しなければならない。それまではとりあえず「中世から近世へ」という枠のままで、しかしその「……から……へ」の理解を含めて検討対象としつつ、新しい切り口を探すしかない。

「中世から近世へ」というテーマの下で、今回は「存在論の変容」を探りを入れる場所とした（つまり、「認識論云々」としなかった）のも、その新しい切り口がこの辺にありそうだという見込みの故だったと言ってもいいかもしれない。

これまで中世哲学会において毎年行われてきたシンポジウムに比して、今回はより若い世代によって担われたように思われる（シンポジストの年齢を調べれば、さほどの違いはないのかもしれないが、思想の若々しさについての私の印象である）。

さて、最初のシンポジスト川添氏は、近世哲学研究から中世哲学研究にシフトしたという経歴をお持ちであるが、それは近世哲学の基本的方向性に何らか違和感をもち、それとは異なる世界の捉え方の可能性を探るためであったと言われ、本シンポジウムでは、近世哲学と中世哲学の基本構図の差異を、人間の認識と存在との関係という側面に注目して、把握しようとする論を展開された。そこで、デカルトの『省察』の議論に注目し、これがアキナスやオッカムの立場からするとどのように見え、評価できるかを検討し、加えて、アキナスとオッカム（中世から近世への転回点としてしばしば言及される）との間にある差異と重なりを、近世を横において見直すという作業を展開された。

次に登場した鈴木氏は、スピノザ哲学における（自己）原因概念の徹底的な分析を、その思想成立の周辺にある事情への目配りをしつつ行われた。中世においては（自己）原因の神への適用は否定されていたが、デカルトがこれを導入したこと、しかしその後も Jacobus Revius をはじめとした批判にさらされ、デカルトの代弁者らとの間に論争があったこと、等々の流れの中でスピノザの特異な自己原因概念は成立したのであった。氏はこうした研究成果を提示することを通して、スピノザの思想の場において、中世哲学と近世哲学との断絶と連続の問題があること、また、中世に遡っての原因概念の変遷の跡付けと、そこにおけるスピノザ哲学の哲学的意義を解明する課題があることを示されたのである。

村上氏は、「存在について考える」と宣言して、世界の中の人間の様態的ありさまや、意識に現れるものを現れのかぎりで捉えるようなことでは決して届かないところ—無限—に向かう姿勢を示され、存在論的証明を論のテーマとされた。そこで、氏は、アンセルムスにおける神の存在証明に「存在の重さ、言い換えれば、本質と実在とが一つになった存在の度合い」を見出し、他方で、デカルトがしたことを、「経験とそれを超えた無限との間に回路を拓こうする試み」、「私の思いに条件づけられた一般存

在論」として評価する。そして、その視点から、自己原因をめぐるライブニッツやスコトゥスの論、トマスによるアンセルムスの証明の批判などを手掛かりにして、氏の姿勢を貫く論を展開された。

いずれも中身の濃い論であり、提題に続いて、フロアからは「デカルトは本当は神なしで済ませたかったのでは」など、問いや意見が次々に出、熱気のこもった討議となった。

提 題

認識・自然本性・神

川 添 信 介

はじめに

近世初期の哲学を中世のスコラ哲学との連続性ないし類縁性を有しているという方向から眺めることは、他のお二人の提題者が試みられるように、十分な意義がある。というよりも、少なくとも近世初頭の哲学の十全な理解のために中世スコラの理解が不可欠であるということはもはや常識に属する。だが、多少私事にわたるが、私が近世哲学からはなれて中世に研究の中心を移したのは、決して近世哲学を歴史的に十分に理解するために歴史的遡及をすることを目的としていたわけではない。そうではなくて、近世哲学の基本的方向性にどこかで違和感を感じ、それとは異なった世界の捉え方というものに触れたいという欲求に促されていたと言えるように思う。

だからというわけではないが、この提題では哲学史上の影響関係といった歴史的観点をひとまずは脇において、近世哲学と中世スコラ哲学の基本構図の差異を、私なりの観点から取り出してみようということにしたい。そして、シンポジウム全体のタイトルは「存在論の変容」なのであるが、私はここでは存在論そのものというよりは、人間の認識と存在との関係という側面から、中世と近世とのあいだに何が生じたのかということを考えてみたいのである。

そのときに一つの導きの糸となると思われるのが、懐疑論をどのように捉えるのかという点であると思われる。セクストゥス・エンペイリコスを中心とする古代懐疑論